



# 俳壇

## 矢島 洛男 選

亡き友の句の景に佇つ秋の浜

平塚市 原 道雄

【評】 亡き友人も俳句を作った人だった。彼の作った景色の中に立つてその句を思い出している。秋の浜を描いて巧いなあ。と思うよ。君も早く死んでしまったもんだなあ。

花野まで前行く人を追ひ越さず

鎌ヶ谷市 海野 公生

【評】 秋の花野を行こうと急いで来たが、前の人はゆっくりしている。そう、花野はこんなに急いで見に行くものじゃあない。

改札を出て 蟬に包まれし

横浜市 塚本 文武

【評】 私もある時期に行けば必ず聞ける場所を知っていたのですが、とうとう今年は聞けませんでした。異常な気象のためか、残念です。

コンパイン 新型となり豊の秋

日南市 宮田 隆雄

炎天に頼りの手摺りつかまれず

川越市 福田 真弓

神官の十畳一間の大屋敷

桐生市 杉戸乃ぼる

ふらついて壁にぶつかる秋の蟬

京都府 山田 国雄

夏休み終へて教室狭きこと

佐賀市 木浦 善徳

短夜や闇より生まれ武甲山

春日部市 相沢 明子

あけびの実一つ添ふ膳夕筑波

土浦市 平佐 悦子

## 高野ムツオ 選

ずっと耐へ八月も耐へこの先も

行橋市 野田 文子

【評】 「八月」は秋の季語だが、炎暑が続く時期。それに戦争の犠牲者を悼む季節との意味が重なる。ずっと耐え続けるのは暑さとともに敗戦の重みと受け止めたい。

アブラゼミ拾って見れば手足なし

さいたま市 立野千鶴子

【評】 息絶えるまでもがきにもがいたさまが失われた手足から想像できる。作者の心の動きも手にのこるよう。油蟬は漢字表記が望ましい。

乾坤を閉ぢ込む露のつづらかな

大和市 おおもりじゅん子

【評】 何という力強く、かつ可憐な露の玉。ミクロの世界の壮大なスベクタクル。「乾坤」の漢語と「つづら」の和語の対比も効果的。

さちさちの発条の音させ飛びにけり

宮崎市 長友 聖次

帰宅後も耳を離れぬ虫時雨

土浦市 今泉 準一

群れ散りてまた群れ散りて秋西

川越市 中沖 稔

町川の黒々とあり星月夜

豊田市 藤本 恭子

水拭きの廊下の光涼新た

蓮田市 飛田多恵子

一隅を占めて談笑敬老日

越谷市 安居院半樹

百葉の長の冷たき目さかな

鹿嶋市 津田 正義

## 正木ゆう子 選

ホースより飛び出す水に乗る蜻蛉

藤沢市 一色 伽文

【評】 とつぜん宙に現れた水に、水の好きな蜻蛉が寄って来て触れた、という景が。珍しい場面であり、「乗る」という断定を新鮮に思う。水への本能的な反応なのだろうか。

煎養してフル回転の室外機

足利市 長 芳男

【評】 どうにかして猛暑の夏を乗り越えた私たち。しかし一番頑張ったのはエアコンの室外機だったかもしれない。室外機こそ、ほんと一息。

西暦にもう一人の自分敬老日

岩出市 沢田慎一郎

【評】 確かに、昭和生まれと平成生まれでは時代感覚が大いに違い、そのせいか生年は和暦で言うことが多い。西暦だと、あっさり生年順。

水足りて沼に感謝の稲田かな

埼玉県 矢内とぎ子

夏草や抜いても抜いても光合成

大阪市 農本 定成

川に出て風変はりたる秋気かな

さいたま市 塚原 賢治

ふるさとの汽水湖沼沼日和

茨城県 片岡 忠彦

忘却に安らぎありて秋桜

福生市 二瓶 利明

山火事の黒き木肌や夏の果て

武蔵村山市 井上香津子

墓参笑顔の君を持ち帰る

相模原市 金本 節子

## 小澤 實 選

発馬機の扉ひらくや初嵐

東京都 渡辺 貴子

【評】 発馬機は競馬の出走馬すべてが一斉にスタートするための設備。全部の扉が同時に開くのだ。秋になって強く吹く初嵐が取り合われず、暑さを吹き飛ばすようだ。

うつむきし首の背後毛茸茸

川越市 大野宥之介

【評】 秋の山に茸を取り入って、同行した女性が茸を探してうつむいた首の背後毛が気になってしまっている。茸は取れそうもない。

サルビアの蜜は甘しと父が吸ふ

京都市 姥目樫

【評】 父が、サルビアの花の蜜は甘いと言って、実際に吸ってみせた。近くにいる子どもも真似てみて、父のこの言葉と行為を忘れない。

屋上に天文ドーム夜学校

京田辺市 加藤 草児

自然薯や塩ビの管に良く育つ

和歌山市 針谷 国光

作り置きソース焼き缶ビール

寝屋川市 岩木 利美

街灯の灯の中に秋の雨

柏市 小畑 昌司

噛み締めめ強き天の園秋早

柏市 洋子

ジ・エンドのジを繰り返す誘蛾灯

熊本市 夏風かをる

犬小屋に鎖の鳴りて秋に入る

川崎市 折戸 洋

## 子規と星空

### 短歌あれこれ 永井祐 (歌人)

真砂なす数なき星のそのなかに  
吾に向ひて光る星あり 正岡子規

十月に正岡子規に関する本を出す予定で準備している。掲出した歌は明治三十三年、亡くなる前々年の歌だ。「すごいこと言ふな」と思っただけに印象に残っていたのだが、よく見てみると上句と下句で時間の流れ方が違いうことに気がついた。「真砂なす」(浜辺の白い砂のような)は星空を見上げた瞬間の感動として受け取れるけれど、下句はそれでは理解できない。「吾に向ひて光る星あり」には、砂のように数多くの星々を見分け、その光り方を吟味したという前提があるのだ。それはある程度の長い時間に思える。

星空をきれいだと思ったことはあるけれど、いつも全体的に見るだけで、こういう時間を持ったことがない。それは私が健康でびんびんしていること、子規がほとんど寝たきりでいたことと関係があるだろう。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭